

# 下野市立吉田東小学校

## 1 学校課題

言語活動を生かした国語科の学習指導の充実を目指して  
～児童一人一人の基礎的・基本的な知識・技能を高めるとともに、  
自ら思考・判断し、表現する力をどう育てていくか。～

## 2 今年度の研究の方向

### (1) 本校児童の課題として

本校では、学習指導要領の趣旨を踏まえ、言語活動が教育の充実の根幹を担うものであるととらえ、平成22年度以降、言語活動を生かした学習の在り方を求め、研究を進めてきた。

平成24年度、平成25年度は、言語活動を通して、児童の基礎的・基本的な知識・技能を高めることと、児童自らが思考・判断し、表現する力をどう育てていくかに焦点を当て、授業研究を中心とする研究実践を進めてきたが以下のような課題がみられている。

- ① 本校の児童の実態からも、「分かっているがうまく伝えられない」ことへの指導方法を更に検討していくこと。説明する活動を繰り返し、伝え合ったり発表したりする経験を積むことが何より大切であること。
- ② 特定の教科学習に限らず、聞く・話す活動を意図的に仕組んだ活動を進めること。また、自分の言葉を説明させる際に理由付け等を行わせること。
- ③ 児童の個人差、個性差に対する指導・支援は、本校のような少人数の集団であっても多々必要である。児童一人一人の学力を高めるには、より多くの指導・支援が必要であり、児童間の個人差が見られるため、個人差に対する対応方法を検討していくこと。  
等について検討の余地があることが確認できた。

そのため平成26年度は、国語科に教科を限定して、言語活動を通して児童一人一人がより生き生きと学習に取り組んでいくこと。それらの学習活動を通して、児童の思考力・判断力・表現力や活用力を育てていくことを目指し本主題を設定した。

## 3 研究のための仮説

国語科の学習の中に、児童の言語活動を意図的・計画的に取り入れ、その充実を図っていけば、児童の意欲付けが高まり、基礎的・基本的な知識・技能や、それらを活用する力が高まり、より主体的に学習に取り組もうとする意欲や態度が育つのではないかと。

## 4 研究内容

### (1) 学習を通して児童に育てたい資質・能力・態度を明確にしていく。

- ① 国語科における学習の重点を明確にする。
- ② 診断的評価等に基づいた、児童の実態把握を進める。
- ③ 単位時間におけるねらいをより具体化し、その時間に育てたい児童像を明確にする。

### (2) 言語活動を生かした、国語科のねらいや児童の実態に応じた学習方法を検討していく。特に今年度は、「単元を貫く言語活動の設定」について理解を深める。その方向は下記の通りとする。

- ア 本単元で身に付けたい力を見極める。
- イ その力を確実に付けるための最適な言語活動を選定する。
- ウ 言語活動を単元を貫いて位置付ける。
- エ 子どもの「大好き」「知りたい」「伝えたい」を重視する。

これらの段階を踏み、児童が自身の思いや願いを生かした表現を膨らましていけるような指導過程を工夫していく。

### (3) 研究実践授業

- ① 1年 国語 こんにちはをみつけたよ（6月4日）
- ② 3年 国語 読んで考えたことを発表しよう（6月24日）
- ③ 5年 国語 作品を自分なりにとらえ、朗読しよう（9月11日）
- ④ 2年 国語 しょうかい文を書こう（10月22日）
- ⑤ 4年 国語 物語を読んで感想文を書こう（10月27日）
- ⑥ 6年 国語 ものの見方を広げよう（12月12日）



## 5 研究の成果と課題

6年ペア学習の様子

### (1) 成果

- ① 単元を貫く言語活動を意識した取組を進めたことで、独立した2単元に関連性をもたせたり、他学年に向けた発表会を行ったりする授業者の柔軟かつ創意ある学習過程が工夫され、単元を貫く言語活動を具体的に国語科の学習の中でどのように進めていくか理解が深まった。
- ② 読書発表会や朗読発表会をする、感想文や解説文を書く等、単元の最終的なゴールを明確に設定した学習を進めたことで、児童が学習の見通しをよりはっきりもつことができ、結果的に単元を通しての意欲付けを図ることができた。
- ③ 学習活動の中で、心情曲線をもとに考える、書き出しを用いて感想の種を書く、二色の付箋を使い分けて事実と評価を書く等学習方法が工夫され、単位時間での内容理解が深まり、そして児童の単元を通して学ぶ力が高まりつつある。
- ④ 児童の考えをペアや少人数のグループで交流させる場を設ける、児童の考えを学習活動の中で見取り励ます、さらには観点を与えて児童の考えを揺さぶる活動を組むこと等、学習の中での指導・支援が工夫され、児童の思考の深まりや表現力の育成が効果的に図れた。
- ⑤ 学習終末の場面で、学習の振り返りや自己評価を適宜行うことで、児童がその時間に学んだことがより明確になり、学習への意欲付けや学びの実感につながった。

### (2) 課題

- ① 単元を貫く言語活動は、どの単元でも行うのではなく、その学年の実態に応じた単元で行うことが有効である。そのため、年間の指導計画を踏まえながら、どの単元や指導過程で重点化を図っていくかを検討することが大切である。
- ② 単元を貫く言語活動には、「ABワンセット方式」「サンドイッチ方式」のような新たな方法が研究されている。教材の特性を考慮したうえで、より柔軟な方法で取り組むことも可能である。この単元では、特にこのような力を身に付けさせていくという明確な考えをもったうえで、年間を通してバランスよく指導事項を検討し位置付けを工夫していく。
- ③ 小集団学習の仕方について一層の検討を図っていく。ペアやトリオ、小集団の形態にとどまらず、少人数であってもより多くの児童間の交流が可能な方法がある。子どもたちの話し合う力を鍛えていく方法を工夫する。
- ④ 国語科の学習のねらいに沿った学習活動を設定していくことや、他教科や道徳、特別活動等の学習を関連させることも今後の課題としていく。
- ⑤ 指導と評価の一体化についても、その教材の特性や学習内容に応じて検討していけるとよい。その際に、教材の特性や児童の実態を踏まえ、この単元、この単位時間ではこのようなねらいをもち学習を進めていくかを考えていく。また、児童の姿が具体的に見取れるような評価基準を設定し、指導に生きる評価を行い学習意欲の向上に生かす。
- ⑥ 学習の振り返りは、その単位時間のねらいに沿った観点を明確にして行うことが大切である。それらの累積を生かし、振り返りを通しての学習指導の改善を図り、評価につなげる。